

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：34420
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2011～2016
 課題番号：23520263
 研究課題名(和文) 平安期における文学と美術の相互関係 文献と文献に近似する現存美術作品からの探求

 研究課題名(英文) The Interrelationship between Literature and the Fine Arts during the Heian Period Investigated from the Source Literature and Extant Fine Art Works Approximating Reference Literature

 研究代表者
 田島 智子 (TAJIMA, Tomoko)

 四天王寺大学・人文社会学部・教授

 研究者番号：80268474

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、文献と絵画の調査を行った。文献については、主として平安・鎌倉期の歴史資料と文学作品を対象に、絵画に関する記述を抜き出して整理した。絵画については、主として現存する絵巻・屏風絵・障子絵を対象に、屏風歌などの文献の説明と似通う絵を、抜き出して整理した。とくに、絵画を広く調査したことにより、平安期の屏風絵の構図とかなり近いものを見出すことができた。それを参考に絵と歌の関係を再考した結果、たとえば「網代」について、その典型的な光景が、絵と歌の相互作用により形成されていったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research project examines the available source literature and pictorial resources. For literature, primarily, the expanse of historical materials and literary works of the Heian and Kamakura periods has been covered, with extracted and classified references to pictorial works. For pictorial sources, pictures closely resembling the descriptions given in written sources such as by *byōbu-uta* have been extracted and classified, and the coverage mostly consists of extant picture scrolls, pictures on folding screens, and pictures on sliding doors. In particular, an extensive survey of the pictorial sources resulted in the discovery of literary works quite closely resembling pictures from the Heian period on folding screens in terms of their structure. With this material as reference, this project rethinks the relationship between pictures and poetry, establishing that typical scenes, for example, in *ajiro*, were produced as an interaction between pictures and poetry.

研究分野：文学・日本文学

キーワード：歴史資料の絵画関連記述 文学資料の絵画関連記述 平安期の屏風絵

1. 研究開始当初の背景

(1) 平安期の文学と美術の関係を解明する研究は、従来屏風歌を中心に行われてきた。本研究も屏風歌に取り組み、歌が絵を伴うことの特徴や、平安社会における屏風歌の役割を明らかにしてきた。その研究過程で、平安文化を包括的に捉えるためには、屏風歌と屏風絵以外にも目を向けることが有効だと着想するに至った。

(2) 文学と関わる美術作品は、屏風絵以外にもさまざまに存在する。歌絵・地獄絵・物語絵・州浜・調度品の模様・衣装の模様など、である。それらは、一つ一つの種類では用例が少ない。そのため、従来、研究の対象となることがあまりなかった。しかし、屏風絵も含めて全種類を総合的に研究すれば、用例の少なさを補うことができると考えた。

2. 研究の目的

(1) 第一の目的は、広く文学と美術の関係を解明し、文化が生活の一部であった平安期のありようを浮き彫りにすることである。

これまでの研究はおもに、大量の和歌資料が残されている屏風歌と屏風絵を対象に行われてきた。しかし、広く平安期のありようを解明するために、屏風絵以外にも、歌絵・地獄絵・物語絵・州浜・調度品の模様・衣装の模様なども視野に入れ、資料を収集する。

そして、研究がもっとも進んでいる屏風歌と屏風絵を基準として、歌絵・地獄絵・物語絵・州浜・調度品の模様・衣装の模様などについて、その構図にどのような意義があったかを位置づけていく。

(2) 第二の目的は、文献を広く調査して美術に関する記述を資料集にまとめること、及び美術資料を調査して写真資料集を作成することである。

写真資料集が必要かつ重要である理由は、以下のとおりである。

平安期は屏風絵をはじめ、文学と関わる美術作品に現存するものがほとんどない。そのため、各研究者はお互いにどのような絵を想定して分析しているか曖昧なまま、研究を進めてきた。しかし、本研究によって写真資料集が上梓されれば、各研究者が共通理解を持つことができるようになり、学界の研究の進展に大きく寄与するであろう。

また、研究者以外の人々にとっては、具体的な絵がないまま研究成果を紹介されても、興味を持つことは難しい。具体的な絵を示すことで、研究者以外の人々にも平安文化の美術と文学の関わりに興味を持ってもらい、研究成果を理解してもらいたいと考えている。

3. 研究の方法

(1) 文学と美術が生活の一部であった平安期の文化を明らかにすべく、研究対象を屏風絵以外にも広げ、歌絵・地獄絵・物語絵・州

浜・調度品の模様・衣装の模様などの全美術作品について、文献の記述を収集・整理する。

収集整理の対象は、文学作品と歴史資料(有職故実資料を含む)とする。歴史資料も収集するのは、文学作品の裏付けのためである。調査年代は、奈良期から鎌倉期の文献までとする。奈良期からとするのは、前時代からの流れを把握するためである。鎌倉期までとするのは、鎌倉期の文献に平安期の資料となるものが書き残されている可能性が高いためである。

収集・整理にあたっては、学生を研究補助者とし、エクセルファイルで整理する。

(2) 屏風絵も含めて、平安期の美術作品はほとんど現存しない。平安期の絵をイメージする次善の方法として、正倉院御物や後世の美術作品から近似のものを示す。平安期の美術品はほとんど現存しないため、奈良期の正倉院御物と、後世の美術作品が調査の中心となる。研究書や、各地の美術館・博物館の図録を中心に、文献の記述と近い美術作品を絵画や工芸品の中から探し出す。

収集・整理にあたっては、学生を研究補助者とし、画像データをコンピュータで整理する。

4. 研究成果

(1) 文学作品と歴史資料(有職故実資料を含む)を対象に、美術に関する記述を収集・整理した。

文学作品については、かなり詳しい記述が得られた。とくに、州浜については、歌合資料を中心に詳細な説明が得られたため、今後州浜をめぐる文学と美術の関係を解明する手がかりとなる。

歴史資料については、詳細な記述は少なく、従来から知られていた『明月記』などの漢文日記がもっとも手がかりとなる。

(2) 歌絵・地獄絵・物語絵・調度品の模様・衣装の模様などについては、予想通り文献資料に関しても美術資料に関しても、分量としては多くは集まらなかった。平安期の文学と美術を解明するためには、屏風歌と屏風絵を基準とすべきだと改めて確認した。今後は、その基準に基づいて、歌絵・地獄絵・物語絵・州浜・調度品の模様・衣装の模様について検討していく。

(3) 屏風絵については、屏風歌の詞書から平安期の屏風絵を推測し、現存する後世の絵と比較したところ、その構図と近いののではないかと思われるものを見出すことができた。それらは画像データとしてコンピュータで整理し、簡単な解説も付与した。該当する題材のうち25例をここに列挙する。

「大饗」

『田中家蔵 年中行事絵巻』(平安末期)・『東京国立博物館蔵 年中行事絵巻模本』(十九

世紀)
「子日」
『住吉物語絵巻』(13世紀)・『春日権現験記絵』(14世紀)
「若菜摘み」
『宮内庁蔵 京都御所 若菜摘み』(江戸末期)
「花見」
『天理図書館蔵 源氏物語絵巻』(十三世紀末)
「帰る雁」
『西本願寺蔵 募帰絵詞』(慶応二年 1351)
「三月三日」
『太田記念美術館蔵 十二ヶ月図扇』
「春駒」
『円照寺蔵 明正院七十賀月次屏風』(元禄五年 1692)
「初午稻荷詣」
『サントリー美術館蔵 十二ヶ月風俗図屏風』(18世紀)・『為恭 年中行事図書画帖』(江戸末期)
「岩清水臨時祭」
『個人蔵 為恭 平安行事図短冊』(江戸末期)
「賀茂祭」
『陽明文庫蔵 賀茂祭絵巻』(江戸時代前期)
「照射」
『粉川寺縁起』(12世紀)・『志度寺縁起』
「鵜飼」
『出光美術館蔵 定家詠十二ヶ月和歌花鳥図画帖』(江戸期)
「涼み」
『冷泉家時雨亭文庫蔵 月次図屏風』(文化十一年 1814)
「雁」
『信貴山縁起』(平安末期)
「駒迎」
『京都御所 駒むかへ逢坂の関』(江戸時代)
「九月九日」
『サントリー美術館蔵 十二ヶ月景物絵巻』(十八世紀)
「秋の田守る」
『神護寺山水屏風』(平安末期)・『伊勢新名所絵歌合』(13世紀)
「秋田と鹿」
『逸翁美術館蔵 葦引絵』(十五世紀)
「小鷹狩」
『神護寺山水屏風』(平安末期)・『明正員七十賀月次絵屏風』(17世紀)
「大鷹狩」
『円照寺蔵 明正院七十賀月次屏風』(元禄五年 1692)
21 「賭弓」
『北野天神縁起』(13世紀)・『年中行事図屏風』(17世紀)
22 「賀茂臨時祭」
『個人蔵 為恭 藤原敏行賀茂松歌意図』(江戸末期)
23 「追儼」
『太田記念美術館蔵 十二ヶ月図扇』

24 「草合」
『田中家蔵 年中行事絵巻』(平安末期)
25 「蹴鞠」
『金比羅宮蔵 奈与竹物語絵巻』(鎌倉後期)

(4) 歌と絵の相互作用を検討し、論文にまとめた。

例として取り上げたのは「網代」である。「網代」は平安中期の屏風絵によく描かれたものであり、屏風歌の詞書を総合すると、「紅葉」・「氷魚(=鮎の稚魚)」・「見物の人々」が取り合わされ、典型的な光景を形成していた。

従来の研究では、屏風絵は和歌的発想を絵画化したものと言われてきた。しかし、本研究者は、絵から歌へという流れもあるのではないかと考え、「網代」を材料に両者の関係を再考してみた。

現存する後世の絵のうち、参考にしたのは、「神護寺山水屏風」(神護寺所蔵)・「平等院鳳凰堂屏絵 九品来迎図のうち下品上生図」(平等院所蔵)・「宇治網代図 土佐光清」(京都市立芸術大学芸術資料館蔵、土佐派絵画資料)・「石山寺縁起絵巻 五巻三段」「同 二巻七段」(石山寺所蔵)である。

「網代」の典型的な光景は、関連する歌と絵を分析した結果、次のような経過をたどって形成されていったことが判明した。まず、屏風歌以前の万葉集では、「網代」が白波と取り合わせて詠まれていた。それが、古今集時代の屏風歌で、川を流れる紅葉に網代を取り合わせるようになった。歌にはそのような取り合わせがなかったことを考えると、絵からの影響の可能性が高い。また、網代と紅葉を詠んだ屏風歌の表現に「速い流れ」が頻出するが、それも「網代」に近接して山々が描かれていたことがもたらしたものであり、絵に影響されたと考える。

後撰集時代には、「氷魚」が屏風歌に詠まれるようになった。「氷魚」と「網代」の取り合わせは早く褻の恋歌にある。おそらく、歌が先行して絵に影響したものだろう。従来指摘のように、和歌的発想が絵画化されたケースである。

さらに後撰集時代には「網代とそこに寄る紅葉を見物する人々」も描かれた。しかし、実際に網代を見物した『蜻蛉日記』等の記事によると、「網代」を見て満足はしていても、「紅葉」が流れ寄った様を見ようとする拘りはない。「網代に寄る紅葉を見物すること」は、絵画世界で作られた光景だったのである。

以上のように、和歌的題材・発想が絵画化される、という一方的な関係でばかりではないことが判明した。絵と歌は相互に作用しながら、網代の典型的な光景を形成していったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

「平安中期の屏風絵と屏風歌の関係 網代を例として」, 「詞林」(大阪大学古代中世文学研究会編) 査読無、57号、2015、1~19

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田島 智子 (TAJIMA, Tomoko)
四天王寺大学 人文社会学部・教授
研究者番号：8 0 2 6 8 4 7 4

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()